慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	長尾琢磨君博士学位請求論文審査報告	
Sub Title		
Author		
Publisher	三田史学会	
Publication year	2022	
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.91, No.3 (2022. 10) ,p.53 (227)- 61 (235)	
JaLC DOI		
Abstract		
Notes	彙報	
Genre	Article	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20221000-0053	

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

長尾琢磨君博士学位請求論文審査報告

論文題目

「第二神殿時代後期のユダヤ人の石切墓

形態・分布が示すヘレニズムに対する相克

論文の概要

当時の人々の死生観や文化を色濃く反映する遺構であり、これ ズムとヘレニズムの関係を探る研究は多くない。しかし、墓は るものである。「ユダヤイズム(ヘブルイズム)とヘレニズ を一定の基準で分析することで、第二神殿時代後期におけるユ 本論はこれらの資料を活用し、 研究を中心にさかんに行われてきたが、考古資料からユダヤイ も資するものである。このテーマについてはこれまで文献史料 けたのかを検討することは現在のユダヤ教、キリスト教理解に 古代ユダヤ教が成立する過程でどの程度ヘレニズムの影響を受 南部地域の石切墓埋葬に関する考古学的研究からあきらかにす 向き合い自らの文化・思想を形成していったのかを東地中海岸 までの調査によってすでに多量の情報が蓄積されてきている。 ム」は古代ユダヤ教研究における一つの大きなテーマであり、 ニズムと直面することになったユダヤ人が、どのようにそれと ウコス朝期〜紀元七○年のエルサレム陥落まで)においてヘレ 長尾琢磨君の博士学位請求論文は、第二神殿時代後期 知られている石切墓遺構の全体 (セレ

論文の構成

をめざしたものである。

ダヤイズムとヘレニズムの相克を新たな視点から検討すること

序章 本研究の目的と視座

第1節 本研究の目的

第3節 本研究の構成

第2節

ユダヤ人の埋葬から考えるヘレニズム化

第1章 第1節 第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する研 第一神殿時代~第二神殿時代前期におけるユダヤ

1 当該期の埋葬の概要

人の埋葬に関する研究

2 鉄器時代の埋葬の研究

第2節 第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬に関す

る研究

1 当該期の埋葬の概要

2 埋葬方法の研究

3 墓の形態の研

第3節 4 第二神殿時代のユダヤ人の埋葬に関する考古学的 ユダヤ地域のロクリ墓の起源の研究

第2章 第二神殿時代後期のエルサレムにおける埋葬の変遷 研究の課題

第1節 第2節 対象遺跡 はじめに

<u>Ti</u> (二三七)

彙 報

3	2	1
アレキサンドリアの墓地	マレシャの墓地	エルサレムの墓地
3	2	1
キルベト・クルカット	2 アブードの墓地	調査目的·調査方法

2

第3節 対象資料の年代決定について

第4節

ヘレニズム時代におけるエルサレムとヘレニズム

都市のロクリ墓の比較

墓に入るまでの構造による比較 墓の内部形態による比較

第5節 墓の内部形態による比較 エルサレムにおける初期ロクリ墓とベンチ墓の比較

3

考察

2

考察

第6節 エルサレムにおけるロクリ墓の変遷

墓の内部形態による比較

おわりに

2

考察

第3章

第7節 パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の

分布――ユダヤ・サマリア地域間の事例から

第2節 第1節 例から はじめに パレスチナ自治区における文化財管理―墓地の事

第3節 2 パレスチナ自治区の墓に関する考古学的踏査 パレスチナ観光・遺跡庁による墓の調査・管理状況 パレスチナ自治区における考古学的調査の状況

クルカッシュの墓地

4

シンジルの墓地

アイン・シニヤの墓地

テル・エン・ナスベの墓地

7 6 5

パレスチナ自治区における考古学的踏査の結果と

第4節 パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓 の分布――ユダヤ・サマリア地域間の事例から

第5節 おわりに

第4章 第二神殿時代後期におけるユダヤ人の埋葬のヘレニ

ズム化

第1節 はじめに

第2節

第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域における

領域の変遷

第4節

前二世紀から前一世紀の東地中海岸南部地域にお

第3節 地形、地質、居住地、街道からみる墓地の立地

前二世紀における墓の分布

ける墓の分布

前一世紀における墓の分布 一世紀における墓の分布

3 2

第5節 おわりに

終章

各章の要約

序章では、本論の研究目的と方法論が提示されている。ヘレニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった第二神殿時代後期において、ユニズムと直面することになった。

石切墓であるベンチ墓が主として利用されており、研究もそれ 神殿時代後期に至るまで、バビロニア捕囚を間に挟みつつも、 討が加えられている。ユダヤ人の埋葬は鉄器時代Ⅱ期から第二 から第二神殿時代前期 れた課題の抽出にあてられている。 も必要なことである。 影響を受ける前のユダヤ人独自の埋葬習慣を把握しておくこと 一連の流れに位置づけられるからである。また、ヘレニズムの 一神殿時代後期の墓だけでなく、それに先行する鉄器時代Ⅱ期 第1章は、 ヘレニズム化によって起こった変化を適切に理解する上で ユダヤ人の埋葬に関する先行研究の整理及び残さ 結果として、 (プトレマイオス朝期) 本論の直接の対象となる第 鉄器時代Ⅱ期には横穴式の の墓も含めて検

ユダ王国の人々の死生観が込められていたことが指摘されてい究がなされており、ベンチ墓には家族が死後も共に在るというの内部形態と集骨による再埋葬(二次埋葬)に関して多くの研に集中していることが示されている。とりわけ、家を模した墓

る。

おり、 とが指摘されている。 こと、ロクリ墓の研究がエルサレムとエリコのものに集中して 用されており、それらがユダヤ人のロクリ墓の起源とどう関 期になると新しいタイプの石切墓であるロクリ墓がエルサレ 代Ⅱ期に製作されたベンチ墓が再利用されたが、セレウコス朝 と大きく関わる内部形態の研究や定量的な研究が不足している たことも確認された。しかし、これまでの議論では、 は、墓のファサードや副葬品など多岐に渡る研究が行われてき ったかが研究の争点の一つであった。また、ロクリ墓に関して ェニキアやエジプトなどヘレニズム化された周辺地域の墓で採 に出現した。ロクリ 続くバビロニア捕囚期からプトレマイオス朝期には、 その全体像が十分反映されていないことが課題であるこ (埋葬用の細長い壁龕)はそれ以前から 埋葬方法 鉄器時

ヘレニズム都市の墓と異なっていることを示している。エルサ室と呼びつつ、エルサレムのロクリ墓は内部形態において他の長尾君は埋葬を行う部屋を母室、そこから突き出るロクリを子長尾君は埋葬を行う部屋を母室、そこから突き出るロクリを子を見まれば、これらの問題を解決するため、まず前二世紀に第2章では、これらの問題を解決するため、まず前二世紀に

生観にも違いがあったことを示唆するものである。そのため長 性が見られたとしても、 利用された可能性を指摘している。こうした点は、 在することを示している。さらに、墓に入るまでの構造も異な も異なっており、二次埋葬である集骨が行われていた証拠が存 レムのロクリはしばしば遺体を安置する棚の上に位置して形状 市のものはより大型で長方形となっていること、 レムのロクリ墓の母室は方形であるのに対して、 は模倣に過ぎず、ヘレニズムの影響は限定的であったと主張し して導入されたことは事実であるが、それは形態の借用もしく 尾君は、 っており、エルサレムでは地表の外部構造が服喪の空間として 当該期のエルサレムの石切墓にロクリが新しい構造と 埋葬プロセス自体が異なっており、 また、エルサ ヘレニズム都 形状に類似 死

一方、前一世紀末から一世紀にかけては、エルサレムにおけるロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前るロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前るロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前るロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前るロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前名ロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前名ロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前名ロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前名ロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前名ロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。前名ロクリ墓の埋葬に大きな変化が生じたことを論じている。市としている。

第3章と第4章では東地中海岸南部地域におけるユダヤ人の

ジル、アイン・シニヤ、テル・エン・ナスベの各墓地で行われ、踏査についてはアブード、キルベット・クルカッシュ、シン

いる。

る 性が高く、 どの墓がアルコソリアなどの構造やフレスコ、 あきらかとなった。この分布の空白は、 ローマ時代~ビザンツ時代、特に一世紀以降のものである可能 がなされている。 ける居住地の少なさや山がちな地形からも支持されるとしてい の形態や立 前二~前一世紀の墓はほとんど認められないことが 地、 盗 周辺遺跡についての報告と年代の概要の推定 掘のため情報量は限られていたが、 当該時期の同地区にお 表採土器から ほとん

は推測の域を出ない。 在の情報からは困難なので、 〇年のエルサレム神殿崩壊後) 傾向を指摘している。 てロクリ墓の分布がユダヤ地域から周辺地域に広がっていった た過去の調査情報に基づき、 こうした考古学的踏査で得られた情報と観光遺跡庁で入手 ただし、 本論は前二世紀から一世紀にかけ 一世紀以降の分布の展開につい 第二神殿時代とその後 の時代の区別をつけることは現 (紀元七 7

0

の傾向を確認している。 変遷とともに議論している。その際、 域全体における墓の分布状況、 第4章では、さらに現イスラエル領も含む東地中海岸南部地 居住地、 街道から墓地の立地を検討した上で、 種類、 支配領域の違い、 埋葬方法の違いを時期的 墓の分布 地形、

されている。

墓や横穴墓が利用されていた。 とベンチ墓が結びついているのはエルサレムだけであり、 以外のユダヤ人居住域の墓地では鉄器時代から継続するベンチ 二世紀の段階では、 母室の壁に複数のロクリを設ける構造 長方形ロクリ墓や個人埋葬はギ それ

前

から、 限定的であることが議論されている。 リシア人やフェニキア人の入植地でのみ確認され、 な要因から海岸平野では石棺墓が利用されていた。 前二世紀のユダヤ人の埋葬に対するヘレニズムの影響は 地形 このこと 地質

的

明確になってきたユダヤ教内の宗派や思想の違いであると主張 因はヘレニズムなどの異文化の埋葬習慣の影響ではなく、 中央山地とは異なる埋葬が行われており、 る墓になったと指摘している。一方、前二世紀のクムランでは 野にも、ユダヤ人墓地が作られたことが確認される。 ダヤ人居住地が作られ、それに伴うようにユダヤ地域全体でロ の谷の墓地群でも中央山地とは異なる埋葬が行われ、ユダヤ人 リ墓は前一世紀にユダヤ人居住域で確立し、ユダヤ人を表象す クリ墓が広く利用されるようになった。イドマヤ地域や海岸平 墓に形態・埋葬習慣の違いがみられるようになった。 前 一世紀になると、 ハスモン朝の領土拡大の影響で各地に 前一世紀のヨルダン 方形ロ

埋葬習慣は、ミシュナの埋葬規定とは異なり、必ずしも たとされる。ユダヤ人の埋葬は一世紀になっても多様であり、 進み、それに伴ってユダヤ人はロクリ墓の拡散者となってい 化とよく似たプロセスで東地中海岸南部地域の「ユダヤ化」 たことが示されている。前一世紀以降は、かつてのヘレニズム 展したガリラヤ地域 一世紀とあわせて考えると、 世紀には、 前一 世紀の分布範囲に加えて、 ・サマリア地域にもユダヤ人墓地が作られ 第二神殿時代後期のユダヤ人の \ П デ朝期に発 が

としている 自身のあり方に多様性が生まれてきたためである可能性が高い ユダヤ人とヘレニズムの関係よりもユダヤ教あるいはユダヤ人 規定されていたわけではないとしている。こうした多様性は、

数のロクリを設ける点でヘレニズムの埋葬習慣の影響を受けて れがユダヤ人の典型的な墓として認識されていたとされる。 たミシュナはロクリ墓をユダヤ人の墓として規定しており、 はいるが、家族を意識した死生観のもとで再埋葬が行われると れており、 のエルサレム以外では、鉄器時代Ⅱ期以来のベンチ墓が用いら 影響で成立したとすることは難しいと主張している。前二世紀 中海岸南部地域で発達したロクリを伴う石切墓がヘレニズムの いう根幹を変えることはなかったとされる。後世に文書化され いない。ベンチ墓から発展した方形ロクリ墓は、 終章は結論であり、 伝統的なユダヤ人の埋葬が継続されていたことは疑 以上の議論から第二神殿時代後期に東 母室の壁に複 そ 地

用され、 てきた状況の結果である可能性が高いとしている。前一世紀に 埋葬習慣とは結びつけられていない。 ロクリ墓以外の墓もオシュアリも、ヘレニズムなどの異文化の ものとは異なっていた。また、 谷の墓の形態や埋葬習慣は、中央山地や海岸平野のユダヤ人の 多様性があることも指摘している。 いはユダヤ人が自らの在り方を問い、 一方、長尾君は第二神殿時代後期を通じてユダヤ人の埋葬に ユダヤ人の主たる埋葬方法も変化した。 前一世紀末からオシュアリが採 特に前一世紀のヨルダンの さまざまな宗派が生まれ そのため、 ユダヤ教ある しかし、方形

#

シュアリへと変化しても、家族を意識した死生観のもとで行 れる再埋葬という点で変化しておらず、総じて、 ったと結論づけられている。 後期のユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムの影響は限定的であ ユダヤ人を表象する墓となった方形ロクリ墓は、埋葬方法が

審査要旨

ている点である。これまでのロクリ墓研究では、ロ 埋葬プロセスはヘレニズム都市の墓と大きく異なることを示し 史学や宗教学などさまざまな視点から研究されてきた。 的な研究である。「ユダヤイズムとヘレニズム」は現代まで西 ように向き合い、独自の文化を生み出したのかを解明する意欲 れるヘレニズム的要素は表面的な類似にとどまり、 にしている点で極めて独創的な研究だと評価することができる 人がヘレニズムと接触した最初の時点における対応をあきらか 本論は、ロクリ墓という考古学的遺構の分析を通して、ユダヤ 欧文化の基層をなす二つの大きな思潮であり、これまでも文献 ることによって、ヘレニズムと直面したユダヤ人がそれとどの ロクリと呼ばれる埋葬用壁龕を伴う石切墓を考古学的に分析 ードにもヘレニズム様式の建築装飾が見られることがあるた レニズム都市の墓にもしばしば見られる要素であ 本論は、第二神殿時代後期の東地中海岸南部地域に出現した 本論の意義は、以下の四点に大きくまとめることができる。 点目は、ロクリ墓の構造の分析から、これらの墓に認めら 想定される クリは他の

め、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされてめ、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされてある。とがし、ユダヤ人のへレニズムに対する反発は大きく、きた。しかし、ユダヤ人のながどのような死生観のもとで独自のの思潮の間でユダヤ人たちがどのような死生観のもとで独自のの思潮の間でユダヤ人たちがどのような死生観のもとで独自の思潮の間でユダヤ人の本で、当該地域の墓地研究を高い、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされてめ、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされてめ、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされてめ、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされてめ、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされてめ、しばしばヘレニズムの影響によって成立したものとされて

し、研究上の取り組みが不足していたからである。と、研究上の取り組みが不足していたからである。本論は、すでにロクリ墓について七九三基の内が低さにどのような頻度で存在するのかを分析している。墓の内でとにどのような頻度で存在するのかを分析している。墓の内でとにどのような頻度で存在するのかを分析している。墓の内でとにどのような頻度で存在するのかを分析している。墓の内でとにどのような頻度で存在するのかを分析している。墓の内でとにどのような頻度で存在するのかを分析している。墓の内では埋葬プロセスを反映する重要な部分である。

ことを示している。また、それぞれの型式の出現頻度を示したたことに注目し、それらにコの字型、口の字型、外周型があるたことを指摘している。また、母室の中央部分の床がピット状にことを指摘している。また、母室の中央部分の床がピット状により大型で長方形になるヘレニズム文化のロクリ墓とは異なるより大型で長尾君が母室と呼ぶ埋葬室が基本的に方形であり、本論はまず長尾君が母室と呼ぶ埋葬室が基本的に方形であり、

よる埋葬が導入されたためだとしている。と平坦化することも定量的に示しており、それはオシュアリにと平坦化することも定量的に示しており、それはオシュアリにと平坦化することも定量的に示しており、それはが鉄器時代(イスラエル王国時代)以来の家族墓上で、それらが鉄器時代(イスラエル王国時代)以来の家族墓

また、母室の側壁に掘り込まれるロクリという壁龕の構造にかったとである。ヘレニズム文化の墓とよく似た標準型の他に幅広型や小型のもの等の多様性が存在することを示し、ロクリの導入自外型のもの等の多様性が存在することを示し、ロクリの導入自体にヘレニズムの影響があったとしても、その用法はむしろ鉄体にヘレニズムの影響があったとしても、その用法はむしろ鉄体にヘレニズムの影響があったとしても、その用法はむしろ鉄体にヘレニズムの影響があったとしても、その用法はむしろ鉄体にヘンニズムの影響があったとしても、その用法はむしろ鉄体にヘンニズムの影響があったとしても、その用法はむしろ鉄体にヘンニズム文化の墓では、基本的にロクリー本に一個人の遺体が埋葬され、名前も刻まれることが多いのに対し、ユダヤ人のロクリ墓ではロクリや棚に複数の遺体やカシュアリが置かれるなど、被葬者の個別性に対する意識ははオシュアリが置かれるなど、被葬者の個別性に対する意識ははオシュアリが置かれるなど、被葬者の個別性に対する意識ははオシュアリが置かれるなど、被葬者の個別性に対する意識ははなかに低いものとなっている。

題点が存在する。しかし、本論ではアブード、キルベット・クスチナ側の情報が欠け、全体像をつかむことが難しいという問ることである。南レヴァント地域における考古学的調査は、常特にパレスチナ自治区の石切墓を独自調査に基づいて含めていにイスラエル国とパレスチナ自治区の石切墓を独自調査に基づいて含めていいサレムやエリコのロクリ墓だけでなく、その周辺地域の事例、ルサレムやエリコのロクリ墓だけでなく、その周辺地域の事例、

ていった様子を示すものとなっている。 紀のエルサレムで始まったロクリ墓が遅れて周辺地域に広がっの物である可能性が高いことがわかったが、このことは前二世を公表している。結果的にこれらの墓地は年代的に一世紀以降というエルサレムの北に存在する墓地群の踏査を行い、新資料ルカッシュ、シンジル、アイン・シニヤ、テル・エン・ナスベルカッシュ、シンジル、アイン・シニヤ、テル・エン・ナスベ

があるであろう。

のは自の意義として、本論はユダヤ人居住地が広がった一世四点目の意義として、本論はユダヤ人居住地が広がった一世の点別は後も、地中海岸やガリラヤ、サマリア、イドマヤ地域、ヨロがあるが、これらの違いを総合的に示したことを示している。なぜそのような違いが生まれたのかについては議論の余地の温があるであろう。

ニズム的な個人意識の萌芽を読み取る見解を完全に排除するこ お異論の余地があるように思われる。 と比べて被葬者の個別性に対する意識が低く、 から前一世紀のユダヤ地域のロクリ墓が、 らに検討すべき点が残されていることも事実である。 などに違いは認められるが、その導入自体がヘレニズムの影響 人の棺であり、墓室内に複数集積されるとしても、そこにヘレ 継続していたのかどうかは、長尾君の検討を経たうえでも、 がなくなりオシュアリが登場した一世紀にもまだその死生観が しての意識を維持していたという指摘は評価できるが、ピット このように本論の持つ独自の学術的意義は疑い得ないが、 いからである。 同様にロクリについても、 オシュアリは基本的に個 ヘレニズム文化の墓 むしろ家族墓と たしかに用法 前二世紀 さ

き課題のひとつだったと考えられる。

析が求められる。 析が求められる。 が求められる。 が求められる。 が求められる。 が求められる。 が求められる。 が求められる。 が求められる。 が求められる。 が表記の批判を受ける可能性がある。 一世紀における地 である点は否定できず、本論はヘレニズムの影響を狭くとらえ

また、本論は基本的に考古学的な分析結果を基盤として議論 また、本論は基本的に考古学的な分析結果を基盤として議論 ま際の埋葬との関係をもう少し丁寧に検討することも可能だったの ではないかと思われる。とりわけ、前二世紀から一世紀は旧約 聖書ダニエル書や偽典に代表される黙示文学が発達し、個人の 聖書がニエル書や偽典に代表される黙示文学が発達し、個人の 聖書がニエル書や偽典に代表される黙示文学が発達し、個人の 聖書がニエル書や偽典に代表される黙示文学が発達し、個人の とのとなったであろう。さらに、二次埋葬は移動牧畜民の めるものとなったであろう。さらに、二次埋葬は移動牧畜民の めるものとなったであろう。さらに、二次埋葬は移動牧畜民の との人がそのかについても、家族意識の継続とともに検討すべ を展開しているが、歴史時代の考古学研究としては、文献研究 を展開しているが、歴史時代の考古学研究としては、文献研究 を展開しているが、歴史時代の考古学研究としては、文献研究 を展開しているが、歴史時代の考古学研究としては、文献研究 を展開しているが、歴史時代の考古学研究としては、文献研究

藤澤綾乃君博士学位請求論文審査報告

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員

副査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員 杉本 智俊

足立 拓朗

副査

金沢大学人文学類教授・資料館館長

論文題目

初期ビザンツ期ユダヤ・サマリア地方のキリスト教化.教会堂及び修道院建築の変遷から見た

論文の概要

藤澤綾乃君の博士学位請求論文は、初期ビザンツ期のパレス がる。従来パレスチナにおけるキリスト教化の経緯とその在り方を教会堂及び修 がる。従来パレスチナにおけるキリスト教化については、四世 いる。従来パレスチナにおけるキリスト教化については、四世 いる。従来パレスチナにおけるキリスト教化については、四世 いる。従来パレスチナにおけるキリスト教化については、四世 れられたのは早くとも五世紀後半からであり、それ以前は都市 部に限定された宗教であったという見解が一部の研究者たちから主張されるようになっている。この見解は近年の考古学的調 ら主張されるようになっている。この見解は近年の考古学的調 方やガリラヤ地方と比べてキリスト教化が遅かったと主張さ 地方やガリラヤ地方と比べてキリスト教化が遅かったと主張される。。

よる各遺構の年代決定が曖昧なことである。古い報告書の多くこうした見解の違いが生じる大きな理由は、考古学的調査に

彙報